

道徳的葛藤場面における ASD 児の行動選択

他者の気持ちの想像が自己優先方略に与える影響の検討

○岡村恵里子

(守谷市こども療育教室)

岡崎慎治

(筑波大学人間総合科学研究科)

大六一志

KEY WORDS: ASD 児 他者の気持ちの想像 自己優先方略

1. 問題と目的

ASD 児が道徳的葛藤場面において、時に適応的でない行動選択を行ってしまう要因は明らかになっていない。仮想的な対人葛藤場面における自己と他者の意見の調整を調べた研究では、知的な遅れのない 6~12 歳の ASD 児は、同年齢の TD 児よりも自己を優先した行動を選択しやすく、自己と他者の両方を考慮した行動を選択しない傾向があった(鈴木・小島, 2012)。本研究では 8 歳以上の ASD 児と TD 児を対象に、アクシデントで道徳的葛藤が生じた仮想的な場面において、①どのような行動を選択するか、②相手の気持ちを考えさせる質問によって、選択した行動に変化がみられるか、③社会的逸脱行動への道徳的判断について調べた。

2. 方法

8~18 歳までの知的な遅れのない ASD 児(疑いの者も含む、平均年齢 13.52 歳) 10 名と年齢を統制した TD 児 20 名を対象とした。

課題の物語は前半と後半で構成した。最初に物語前半を提示した後、事前質問(自分だったらどうするかという行動選択)、追加質問(各登場人物の気持ちを想像する)、事後質問(どの登場人物にとっても良いと思われる行動選択)の順で回答を求めた。そして、物語後半を提示し、登場人物が行った逸脱行動の道徳的判断を求めた。判断は「とても悪い」から「とても良い」までの 7 段階で評価した。

物語は ASD 児と TD 児ともに葛藤を感じる場面を想定して 3 種類作成し、予備実験において物語の設定や逸脱行動の悪さの度合いが分散するように調整した。物語の内容は、①「約束課題」: 友達と遊ぶ約束を忘れて、他の友達と約束をする、②「ペン課題」: 友達が自分の姉のペンを誤って壊す、③「お金課題」: お金がないことを忘れてゲームセンターに行く約束をするであった。逸脱行動は、①一人に何も言わずにもう一人と遊びに行く、②友達に謝ってきてほしいと言う、③家族の貯金箱からお金を取るであった。

分析では、事前質問と事後質問における回答を、物語の文脈に合わせて作成した行動カテゴリーに分類した。課題ごとに事前質問と事後質問の行動に変化があった人数と、変化が顕著な行動カテゴリー内で変化があった人数の群間差を Fisher の直接確率検定で比較した。また、道徳的判断の得点は、数値が高いほど「悪さ」の度合いが高いように 7 件法で数値化し、群(2)×物語(3)の 2 要因分散分析を行った。なお、本研究は筑波大学人間系倫理委員会の承認を得た上で実施された。

3. 結果

事前質問と事後質問で回答に変化があったのは、①約束課題では ASD 児 1 名と TD 児 12 名、②ペン課題では ASD 児 1 名と TD 児 4 名、③お金課題では ASD 児 1 名と TD 児 8 名であった。各課題の群間差を比較したところ、約束課題のみ有意な差がみられた ($p < .05$)。約束課題の事前質問では、ASD 児と TD 児ともに「断る」のカテゴリーが半数以上を占めていた (ASD 児 5 名, TD 児 15 名)。そして、事後質問では、「断る」を選んだ TD 児群 15 人のうち 11 人が他の行動を選択していた。一方で、ASD 児群は、全員

が事後選択でも「断る」を選択していた。両群の「断る」カテゴリーから変化があった人数は、TD 児群の方が有意に多かった (Fig.1 参照)。また、TD 児群では「断る」カテゴリーから事後選択において選択が変化した人のうち、7 人が「3人で遊ぶ」という行動を選択していた。

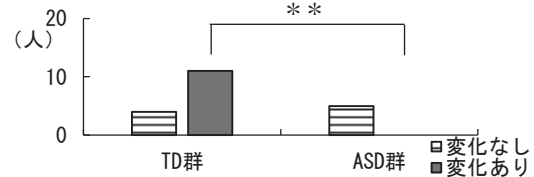


Fig.1 各群で「断る」カテゴリーから変化があった人数

道徳的判断における課題及び群ごとの平均得点は、①約束課題: ASD 群 $M = 6.14$ ($SD = 0.35$), TD 群 $M = 6.45$ (0.80), ②ペン課題: ASD 群 $M = 4.71$ (1.67), TD 群 $M = 5.40$ (1.02), ③お金課題: ASD 群 $M = 6.57$ (0.49), TD 群 $M = 6.05$ (0.86) であった。分散分析の結果、課題の主効果がみられた ($F(2,56) = 13.70, p < .01$)。群の主効果はみられなかった。課題について多重比較を行ったところ、ペン課題が約束課題とお金課題よりも有意に悪さの度合いが低かった。

4. 考察

一部の物語において、他者の気持ちを想像させる質問を行うと、多くの TD 児は選択した行動を変化させたが、ASD 児には変化が生じなかった。変化が生じた物語で選択された行動を先行研究の行動カテゴリー(鈴木ら, 2012)に当てはめると、「断る」は「自己優先」、「3人で遊ぶ」は「両方優先」の行動選択だと考えられる。このことから、ASD 児と TD 児ともに「自己優先」の行動選択を行う場面において、相手の気持ちに注意を向けさせるヒントがあることで、TD 児は「両方優先」の解決策を想起するきっかけになるが、ASD 児は「両方優先」の解決方法の想起に直接つながらない場合があることが示された。このことは、TD 児と ASD 児では、道徳的葛藤場面において「自己優先」の視点が継続する要因が異なる可能性を示唆している。

社会的逸脱行動への道徳的判断については、ペン課題において ASD 児の平均得点が「どちらともいえない」から「少し悪い」までの範囲にあったものの、両群に得点差はなかった。両群の道徳的判断に差が無かった要因として、今回の研究の対象者が一定年齢以上の児童であり、ある程度の社会的経験があったことが理由として考えられる。

以上より、TD 児と同様の道徳的判断ができる ASD 児であっても、登場人物の気持ちを想像するヒントを与えられた際に、「自己優先」の視点を TD 児と同じようには変化させないことが示された。今後は、ASD 児にとって有効な他者の気持ちを想像させる質問のフレーズや言語的プロンプトの手順について検討する必要がある。

【文献】鈴木ゆかり・小島道生 (2012) 高機能広汎性発達障害児の問題解決場面における自己と他者の調整. 岐阜大学教育学部研究報告, 60(2), 139-146.

(OKAMURA Eriko, OKAZAKI Shinji, DAIROKU Hitoshi)